



私の

東京物語

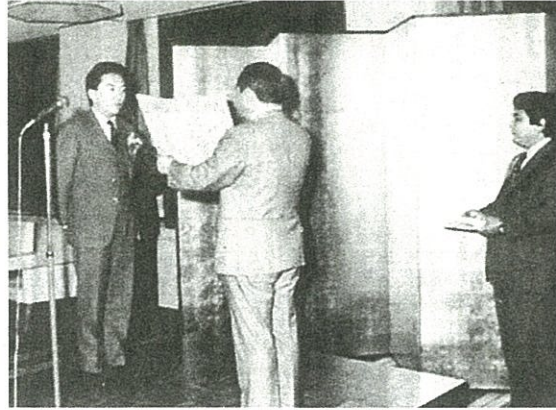
一九八〇(昭和五十五)年秋に

「文藝賞」を受賞し、翌年一月に出版された「なんとなく、クリスタル」は、百万部を超えるベストセラーとなります。

〈クリスタル族〉と呼ばれる社会現象を生み出す一方、「ブランド物をいっぱいぶら下げた、頭の空っぽなマネキン人形が、青山通りを歩いている空疎な話」と冷笑する文芸評論家も現れました。

「田中君は、東京の都市空間が崩壊し、単なる記号の集積と化したということを見て取り、その記号の一つ一つに丹念に注をつけるとうかたちで、辛くもあの小説を社会化することに成功している」。こそばゆくもうれしい指摘とともに

たなか やすお
田中 康夫



作家デビュー

1980年秋、文藝賞を受賞した

に、「文藝賞」の選評で「後世、畏るべし」と過分な評価を記して下さった江藤淳さんが、「僕が褒めたから、文壇は反発したんだよ」と微笑笑されたのを思い出します。

「ある朝、目覚めると私は有名になっていた」。風刺と機知に富む作品を残したジョージ・バイロンの至言のごとく、街を歩くと多くの人々に振り向かれる存在となった僕は、その春に一橋大学を卒業します。

受賞前から内定していたモービル石油(現エクソンモービル)に入社。座学研修に続く現場研修先は、横浜のガソリンスタンドでした。

(作家)